

甲南女子大学の女性教育の今後を考えるプロジェクト

これからの〈女性教育〉の話をしよう

NEWS LETTER

女子大学の存在は終焉を迎えたのだろうか？

甲南女子大学は、1920年にその前身甲南高等女学校設立を実業家安宅彌吉が主唱し開学、今年は学園創立100周年を迎えます。1911年に開園した甲南幼稚園、1912年に開校した甲南小学校、そして学年が上がるにつれてその進路として1919年に甲南中学校（旧制）が設立されました。女学校設立が1年後というのは、男子学生優先という当時の社会状況を反映しています。女性の地位向上が叫ばれた大正時代でしたが、女性の参政権獲得は1945年まで待たなければならず、男女平等という意識はまだ低いものでした。

その後女性の社会進出が進み、1985年に男女雇用均等法が成立し翌年施行されました。その法律の下、**社会や仕事の場での男女差別は無くなったはず**なので、教育の場でも女子大学は不要という考えにたどり着きます。すべての女性が、男性と対等に社会で働き、堂々と自らの意見を発信し、社会をより良いものにし、そして次の世代にバトンを繋げていく…理想の姿ですが、残念ながら日本ではまだそこまで社会は成熟していません。

2020年は新型コロナウイルスの影響で、多くの大学で対面授業が再開できず、様々な問題が浮き彫りになりました。**大学自体の存在意義さえ問われています**。経済格差、情報環境格差もあり、学生たちは不安と混乱と孤独を感じているでしょう。女子学生にとっての試練はこれからなのかもしれません。どんな状況下であっても**生き抜く力を身に付ける**、女子大学の求められる役割は**正に今**なのです。

日本語日本文化学科 プロジェクト共同者 米田明美



コロナ禍と女性教育

学長 森田勝昭



本学は学園創設 100 周年事業の一環として、新たに 2 学部を設置したほか、新校舎や正門新築など環境整備も進めています。女性としての well-being(良き生き方)を実現するため、「未来への実践力」育成の教学改革も推進中です。ただ 1 月以来のコロナウイルス感染症の拡大は、大きな課題を大学に突き付けました。

これまで人類はウイルス感染症のインパクトを何度も経験してきました。今回は経済と並んで、教育制度が根底から揺さぶられるという事態が起きました。Covid19 は教育に大きなインパクトを残した初めてのウイルスでした。学びの空間は閉鎖され、大学の既存価値や存在意義が問われました。

登校という前提が崩れた結果、オンライン授業が導入されました。当初は緊急避難の手段とみなされていましたが、やがて教育の根本的転換を促すものだと判明しました。私たちは今、オンライン教育のメリットを徹底的に開発し、同時に対面式授業の質を向上させる段階にさしかかっています。それが既存の教育を変革し、充実した女性教育システム構築への道だと考

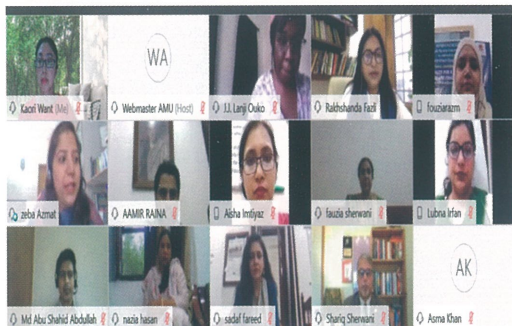
えています。

コロナ禍で非正規労働者の苦境が明らかになりました。GDP が大きく落ち込み、大中小企業の大廃業時代が迫っているという予測もあります。あらためて女子大学には根源的な問いが突きつけられています。社会変動の波が押し寄せる困難な時代に、本学は女性教育の未来を追及していきます。



ジェンダー平等に関する国際学会に参加して

国際英語学科 プロジェクト代表者 ウォント盛香織



8 月 19 日・20 日に、インドの Women's College, Aligarh Muslim University が主催したオンラインによる国際学会 Gender Equality for a Better World: Issues and Challenges に参加する機会を得た。10 カ国、500 人以上の参加者からなる学会で、女性と移民、環境、医療等様々な問題について発表があり、議論がなされた。

私は日本におけるジェンダー問題と、女性教育プロジェクトの活動やカリキュラムの「女性とジェンダー科目」も含めた本学の女性教育の取り組みについて述べた "From Social Cogs to Game Changers: Educational Challenges to Gender Inequality in Japan" という論文を発表した。先進国なのになぜ女性の地位が低いのか、若い女性

のジェンダー意識が低いのはなぜか、本学の女性教育の効果は何か、といった質問やコメントを頂いた。こうした形で本学の女性教育について、様々な国の人々に知って頂き、かつ意見交換をすることができ、大変貴重な機会となった。また、諸外国の女性（少女も含む）の多くが今でも大変深刻な問題を抱えている現実について、現場からの報告を拝聴し、21 世紀になってもなぜこんなにジェンダー平等への道が困難なのだろうかと思いを改めて考えさせられた。

本学でも国際支援や国際交流を積極的に推進しているが、例えば海外の女子大学や女性プログラムと協定を結び、より女性教育に特化した国際学術交流を実施したなら、女子大学ならではの特徴あるグローバル教育の展開が期待できるのではないか、という印象を持った。

女性教育を考える会議

国際英語学科 森本真理

この会議は、なぜ女子大なのかという野崎学部長のバリーシンプル Q からスタートしたと聞いた。私はこの 4 月にグローバルビジネスを主に担当する新任大学教授として本学にご縁を頂いたのだが、COVID19 により色々な「考え直し」が必要となった。グローバルビジネスに 40 年近く従事し、多色なビジネスシーンを経験した為、これがグローバルキャリアであるという自負があったが、今や海外出張もままならない。「グローバル」や「(異文化) コミュニケーション」の意味が今後変わらざるを得ない状況である。膨大な情報や考えや感情が私を囲むため、簡単にはうまく整理できない。そんな時、この「シンプルなそもそも」が重要ではないか。私が経験した 40 年のビジネスライフの間に随分女性が働く環境は改善したとは言え、まだまだ変わらない点が山ほどある。会議に初めて参加し、そこになぜ女子大なのかというヒントがある気がした。今後この「場」を借りて皆様の情熱とお知恵を頂き深堀していきたい。



女性教育を考える会議 多文化コミュニケーション学科 中西知子

会議に参加して考えた。女子大学の良さとは何か？ 学生時代には様々な人々と出会い、「こんな生き方もあるんだ」と気づき、自身の生き方の選択肢をできるだけ増やすことが大切ではないか。例えば、専業主婦になる人生があってもいい。ただし、様々な生き方を知った上でそうするのと、敷かれたレールの上を歩いてそうなるのとは違う。学生には、豊かな学びと経験の先で、自身の人生を自らの意思で選択できるようになって欲しい。そのためには、頑張れば手が届きそうな尊敬できる先輩、いつかあんな風になりたいと思える先生など、将来の自身を重ねられる身近なロールモデルを示すことが大切ではないだろうか。女子大学だからこそ、そうしたロールモデルは身近に必ず見つかる。まずは、私自身が学生にそう感じてもらえるような生き方をしていたい。





「女性のライフコースと仕事 女子大学の果たす役割」

教育イノベーション 女性教育プロジェクト講演会



登壇者：大沢真知子先生(日本女子大学)

開催日：2020年2月6日(木) 13:30～16:15

会場：甲南女子大学 911 教室

主催：甲南女子大学の女性教育の今後を考えるプロジェクト

日本女子大学教授で現代女性キャリア研究所所長の
大沢真知子先生を講師に迎えて開催された本講演会では、第1部で女性を取り巻く労働環境の現状についてお話しいただき、第2部では本学の前川幸子先生と野崎志帆先生を交えたディスカッションが行われました。ここでは講演内容の一部を抜粋して紹介します。

日本社会の仕組みについては、これまでほとんどが男性視点で語られてきました。しかし社会では常に女性がまず問題にぶつかって、同じ問題が男性に波及していくという流れがあります。つまり女性の問題とその解決方法がわかることで、男性が同じ問題に直面したときに役立つのです。ジェンダーの視点から日本社会を見る研究は女子大だからできるわけで、直に若い女性の声が聞けるのは女子大の大きなメリットでしょう。

しかし日本では特に政策分野でジェンダーの視点が欠けています。世界では、戦略的に女性の活躍を推進することで経済が発展すると気づき、積極的に女性人材を育成してきました。日本でも片働きから共働き社会へ転換し、男女が仕事と家庭を分担する時代になりつつあるものの、どうしても仕事中心になってしまいます。

ワークとライフを統合した新しい時代を生きることをワークライフインテグレーションと言って、仕事以外の活動も充実させることが人生の充実につながるという考え方があります。そのためには「キャリア」を「仕事」ではなくて、「生涯にわたって自分がいかに生きるのかをプランすること」と捉える必要があります。学生に対しても「どんな人生を生きたいのか」を明確化させていくことが、その後の人生に重要になっていくわけです。そういう視点を持った授業を女子大で開発して男子大学生を呼び寄せ、ワークライフインテグレーションを考えた人生設計をしていこうと男性にも提案できるはずです。

先進国では「静かな(女性の役割の)革命」と「ジェンダー革命」という2つの革命がかつて起きました。前者によって女性が働くようになり男女間賃金格差が縮小し、パートナーシップを基盤にした男女関係、夫婦関係ができるわけですが、日本は今、一生懸命ジェンダー革命を起こそうとしています。なぜなら、女性の役割改革を起こすこと、労働市場でのジェンダー平等を作ることには失敗したからです。

日本でも専業主婦願望が減少して働く女性が増えるなど、一見女性の役割革命が起きていますが、国際比較ではジェンダーギャップが依然として大きく、男女間賃金格差及び大学教員や研究者の女性割合も低いままです。さらに雇用契約も不安定です。そして高度専門職の女性割合もOECD諸国で一貫して最下位です。高度専門職は入社時の賃金が高い上にキャリアとともに賃金が上がっていくのに対して、準専門職は上がらない。日本の女子大は

伝統的に準専門職への資格を出して就職率を上げてきましたから、私たちの教え子の多くはそこに含まれている可能性が高いのです。さらに、管理職の女性割合が低いという性差別もあります。女性が差別されない環境、差別があったときに是正されるような法的整備をしていくことも課題です。

これからの時代を考えると、女性は次のステップにいくためにもっと上を目指さないと役割革命を起こせません。それには国あるいは大学の強いリーダーシップが必要です。そして、女性の投資効果を高めないと女子大は生き残れないでしょう。

カルビーの松本晃会長は女性の管理職を増やしていった方ですが、「男性が持っている既得権益を崩さなければ女性は活躍できない。女性の活躍は企業戦略として非常に重要だということを会長自らが宣言しない限り難しい」とおっしゃっていました。

貴重な時間をいかに分配してワークライフインテグレーションを生み出していくか。そのためには、働き方改革を起こすしかない。男性の価値観を変えるには、女性が入っていくのがベストなのです。女性の活躍が今の日本社会を変えていく起爆剤になりうるのです。

松本会長は、成功する会社というのは自らが変われる会社だとおっしゃっていました。女子大もまた変わる勇気を持つ必要があるということです。そういう時代の転換点にきているのではないかと思います。



2021年2月4日(木) 午後開催予定

女性教育シンポジウム「甲南女子大学の女性教育とは？(仮)」

※詳細は、決定次第お知らせします。奮ってご参加下さい。



女性教育カリキュラムの授業やってみた！ 「女性のための栄養学」の授業を実施して

医療栄養学科 プロジェクト共同者 天野 信子

2020 年度前期、医療栄養学科の教員 13 名によるオムニバス担当で「女性のための栄養学」のオンライン講義を実施した。全学の 1 年生から 4 年生を対象にした本授業の狙いは、「近未来に母となる女子学生が、栄養学的な観点から健康な一生を送るために必要な知識を修得する」であり、各教員の専門性に合わせたテーマ設定を行った。

全テーマを紹介すると、まず、健康づくりと食生活の概論として、『がんにならない生活習慣・食事』、『健康長寿の源“つくって食べよう!! 三度の食事”』。次に、食品学や調理学の観点から食生活の基礎知識として、『食品色素成分の機能と健康』、『調理とおいしさの科学』、『腸の健康に役立つプロバイオティクス・プロバイオティクス』、『食品成分の機能性評価』。さらに、女性のライフステージにおける食生活・栄養に関する実践的知識や技術として、『妊婦に知ってほしいビタミン栄養情報』、『知らないで損をするかも。女性のための感染症学』、『栄養と女性の貧血』、『骨粗鬆症と食生活習慣』、『若年女性の低栄養問題を知る』、『妊娠期と授乳期の最適なエネルギー・栄養素摂取量』、『ライフステージ別に考える女性のための栄養学』である。

各教員が設定した講義内容は、全学生を対象にした場合には専門性の高い内容である。そこで、各教員は専門知識に乏しい学生にも解り易く、興味を持って主体的に学べる授業の工夫をした。例えば、女性に関心の高い「美肌と紫外線対策」を講義の導入部とし、健康維持における食生活の重要性につなげる展開を行った。その結果、食生活において緑黄色野菜を積極的に摂取することの重要性を理解することができた。また、日本人の主食である米の種類、栄養価、炊飯の

原理など身近なことで、関心を惹きつけたうえで、おいしさを科学的に評価する方法について解説した結果、食材への関心、調理の興味を深めることができた。さらに、受精から出産までの時期に必要な栄養素は、すべて母親が食べるものに依存している、という刺激的な導入で学生の関心を惹きつけ、母性のための栄養・食生活は、妊娠前のこの時期から適正な食習慣を確立することの重要性の理解ができた。

女性は、生物学・生理学的な性差により、身体組成の差異があり、妊娠・出産機能を持ち、女性のライフステージにおいては、それを要因とする貧血、妊娠高血圧症候群、骨粗鬆症などの栄養状態の性差が生じる。「女性のための栄養学」の科目名称にあるように、今回の授業の第一義的な目的は、女性の生物学・生理学的特性を踏まえた食生活・栄養に関する知識や技術を獲得することにより、健康的な生涯を送るための一手段を学ぶことであった。

この学びによる第二義的な目的として、生物学的・生理学な性差（セックス）と文化的・社会的に形成された性差（ジェンダー）を理解して、日本の現代社会におけるジェンダーについて議論ができれば有意義であったと考える。

2020 年度前期は、緊急事態によるオンライン授業であったため、スライド資料の配信を主にした一方通行型の授業を余儀なくされた。多学科の学生が履修できる選択科目なので、アクティブラーニングを取り入れた授業を展開できると、学部学科を超えた様々な考え方をもつ学生の意見や考察を交換して、この科目内で、第一義・第二義的目的を完結できた可能性も考えられる。



リレーエッセイ

自分らしさを活かした全員発揮型のリーダーシップ開発

文化社会学科

プロジェクト共同者 佐伯 勇

コロナ禍により、世界中の人々は組織のあり方を再考することとなった。複雑で変化が激しく、創造性とスピードが求められる現代社会では、トップ層が発揮するリーダーシップだけでは、変化に追従することすら困難となる。

リーダーにとって、自分が効果的なリーダーシップを発揮することは重要だ。しかし、それ以上に重要なのは、他のメンバーが効果的にリーダーシップを発揮するための支援だ。メンバーにとって、リーダーの指示や期待にいかに応えるかは重要だ。しかし、それ以上に重要なのは、役職や権限がない中で、いかに効果的なリーダーシップを発揮するかだ。

ここで言うリーダーシップとは「組織の目標達成に向けて発揮する他のメンバーへの影響力」のことを指す。組織の誰もが必要に応じ必要なリーダーシップを発揮している状態を「シェアド（共有型）・リーダーシップ」と呼ぶ。

本学では 2017 年度に、シェアド・リーダーシップを開発する全学共通科目を、西日本の大学と全国的女子大学で初めて開講した。本科目の特徴は次の 2 点だ。

①経験学習の重視。チームでプロジェクトに取り組む過程で、相互フィードバックと振り返りを行う。自分の特性や行動のチームへの影響を認識し、行動を改善し続ける。

②前年度の受講生から選抜された学習アシスタント

(LA) が授業作りと運営に関わる「学生中心型」教育モデル。

本科目では、受講生と LA の両方が成長実感を持つ。「前期授業の中で本科目以上に成長を実感した科目はない」と回答した受講生は 81% (前年度 87%)。昨年度 LA を担当した 3 年生は、今年度桃山学院大学の LA として、同大学 2 年生の指導にあたっている。

最後に、本学でリーダーシップ教育を実施する意義を 2 点示す。

①女子大学は、女性が性別役割規範から解放され、自分らしさを探求しやすい環境であること。

②本学学生の特性がシェアド・リーダーシップの開発に向いていること。PROG テストによると、本学学生は親和力と協働力が特に高い傾向にある。引っ張るリーダーシップから、気持ちに寄り添うリーダーシップへ。学園 100 周年のキャッチコピー「輝く力、輝かせる力。」とも親和性の高い考え方ではないだろうか。

本科目は、前後のミーティングを含め、火曜 2 限の授業を原則として公開している。是非お気軽にご見学いただき、本学の女性教育のあり方を共に考えていきたい。



国立女性教育会館 (NWECC) 提供 パッケージ貸し出し

前期は、大学キャンパス入校禁止のため、行えませんでした。後期は実施します。今回のテーマは「SDGs」です。図書館本館 2 階 C 階段前木製書架に設置されています。ご利用ください。

これからの〈女性教育〉の話をしよう
NEWS LETTER vol.3 2020 Autumn

発行日 2020 年 10 月

発行元 甲南女子大学の女性教育の今後を考えるプロジェクト

問い合わせ 代表 ウォント盛香織

e-mail kaorimw@konan-wu.ac.jp

編集責任 米田明美

e-mail yoneda-a@konan-wu.ac.jp